

川

ともし火はたきものにこそ似たりけれ、といひたりければ、兵衛とりもあへず、ちやうじがしらの香やにほふらんとついたりける、いとおもしろかりけり、

〔倭訓栞前編二〕あぶらわた 今物語に油綿と見えたるは、寒夜の節會などに、丁子の油を綿にひたし、面及手などに塗らるゝをいへり、

〔古今著聞集十六〕後鳥羽院の御とき、性親があしげといふあがり馬ありけり、たまるものすくなかりける中に、まもつけの武景、かみをおほくとりぐしてのりけれ共猶おちけり、それによりて、かみをみじかくきりて、あぶらわたをぬられたりければ、たけかげいよ／＼たまらざりけり、それよりぞ武景をば、善知識の府生とは人いひける、

〔香取宮遷宮用途記〕一御装束二具内

一女體一具略○中

御油壺三口、一口油綿略○下

猪油

〔日本靈異記中〕行基大德放天眼視女人頭塗猪油而呵嘖縁第廿九

故京元興寺之村、嚴備法會、奉請行基大德、七日說法、于是道俗皆集、聞法聽衆之中、有一女人、髮塗猪油、居中間、法大德見之、嘖言、我甚臆哉、彼頭蒙血、女遠引棄、女大耻出罷、凡夫肉眼是油色、聖人明眼是視、安血於日本國、是化身聖也、隱身之聖矣、○又見今昔物語

〔古老口實傳〕一猪油所用事、古老禁制之、

五味子

〔重修本草綱目啓蒙十四〕五味子略○中

南北ノ異アリ、○中 南五味子ハ、サネカヅラ、一名ビンツケカヅラ、筑前 トロ、カヅラ 石見 ビ

ナンセキ 伊州 ビジンソウ 大坂 ビナンカヅラ 讃州 クツバ 勢州 フノリ 土州 フノリカ